様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月　１日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2006－2008
課題番号：18390583
研究課題名（和文）　ナース・トリアージの有効性の検討－アクション・リサーチ法による試み－
研究課題名（英文）　Examination of the effectiveness of the triage by nurses — Trial by the action research method —

研究代表者
坂口　桃子（SAKAGUCHI MOMOKO）
滋賀医科大学・医学部・教授
研究者番号：40290481

研究成果の概要：
本研究は、1 施設の協力を得てアクション・リサーチの手法を用いて実施した。救急初療におけるナース・トリアージを効果的に運営するための要件を導き出すために、ナース・トリアージの現況の問題を把握したうえで、トリアージ・ガイドラインの見直し及び教育の場として「臨床判断カンファレンス」を設定した。看護師各人の経験知を掘り起こし共有化するカンファレンスでは、事例ごとにトリアージから転帰までを追跡・検討し、ガイドラインの再検討等を行った。「臨床判断カンファレンス」は、ＯＪＴとして有益な教育の場となった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2007 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	5,100,000	1,530,000	6,630,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学
キーワード：救急看護、ナース・トリアージ、看護技術、アクション・リサーチ

１．研究開始当初の背景
わが国の救急医療は救命救急センターに代表されるように第三次救急を中心として発達してきた。その結果、圧倒的多数の国民がよりどころとする初期・二次救急医療が十分に整備されたものとは言いがたいのが実情である。看護においても、救急看護認定看護師が育成されているものの、重症集中看護との線引きも曖昧である。救急医療のスタートであるトリアージに関しては、概念の浸透、トリアージ・システムの整備、トリアージ・ナースの育成等において多くの課題が残されている。

２．研究の目的
1) 救急初療外来におけるナース・トリアージの実施記録とトリアージ後の診療記録を分析することから、アンダー・トリアージ、オーバー・トリアージの発生状況の把握とトリアージに影響を与えた要因を検討し、救急初療ナース・トリアージの問題点を明確にする。
2) 上記に基づき、トリアージ・ガイドラインを策定し、実施評価後その有効性を検討する。
3) トリアージ・ガイドラインに用いたトリアージ・ナースの教育プログラムを開発し効果を検討する。

３．研究の方法
本研究は、救急看護の現場にある問題を現場

で発見し、解決していくためにアクション・リサーチの手法を用いた。

1）文献検討

国内外の文献について、トリアージ、トリアージ・ナース、看護、救急等のキーワードで検索し、トリアージ・ガイドライン、トリアージ・ナースの教育プログラムに関する文献を中心に検討した。

2）トリアージの有効性の検討

トリアージ・システムを導入している救命救急センターの協力を得て、ナース・トリアージによる問診票（平成19年9月－10月に当該施設救命センターを受診し看護師によるトリアージを受けた患者2,101名のトリアージ問診票をデータベースとした）からアンダー・トリアージとオーバー・トリアージの発生状況を調査した。

3）トリアージ・ガイドラインの再検討

協力施設で概に導入しているトリアージ・ガイドラインの活用状況を問診票からピックアップし、施設看護師にフィードバックし、研究者とともにその問題点を検討した。

4）トリアージ・ナースの教育プログラムの検討

協力施設で実施されている教育プログラムに基づく到達状況を、当事者の意見から把握し、再検討を要する事項について討議から見出した。

４．研究成果

1）トリアージの現況の把握

平成19年9月－10月に当該施設救命センターを受診し看護師によるトリアージを受けた患者（三次救急患者は除く）2,101名のトリアージ問診票をデータベースとした。

（1）トリアージの実施状況：

①時間的要因に関する事項：受付からトリアージ開始までの平均所要時間は12分で、最も短時間は深夜勤帯の9分で、最も時間を要したのは18分であった。受付から診察開始までの平均所要時間は31分であった。

②トリアージ内容に関する事項：特徴的なことは、小児患者のフィジカル所見の未記入率が高く、備考欄に観察所見を記入していることであった。

（2）診療後の転帰からトリアージの妥当性に関する事項：アンダートリアージは、全件中66件見出された。65歳以上の患者が3割を占めた。高齢者にアンダートリアージが多く65歳以上の患者がその3割を閉めていた。逆に、小児においてはフィジカル所見の記載が少ないにもかかわらずアンダートリアージが少なかった。

2）トリアージ・ガイドラインについて、3）教育プログラムの策定に向けて：

（1）看護判断カンファレンスによって経験知の共有化を図りながら、ガイドラインの問題点の抽出を行った。また、高齢者救急、およびオーバー・トリアージの傾向に偏りがちな小児救急に焦点を当てて、トリアージ・ガイドラインの策定と見直しを図った。見直しにおいては、アンダー・トリアージが生じやすい高齢者のトリアージには、病態よりも緩慢に認知される自覚症状を引き出すこと、小児においては蹄泣等によるバイタルサインの正確な測定の困難さに加えて、付き添いの親の混乱を収拾できずにフィジカル所見等客観的データよりも状況的因子によって、トリアージを進めている実態から、成人のトリアージ・ガイドラインとは別に小児用、高齢者用のガイドライン（案）を検討した。ガイドラインの評価を実証的に検証するに足る大規模調査、および、トリアージ・ナース育成教育は今後の課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1件）

①坂口桃子、作田裕美、新井龍、中嶋美和子、田村美恵子、木川真由美、村井嘉子：臨床判断能力の向上に向けた「暗黙知」伝授の一方略、滋賀医科大学看護学ジャーナル、5（1）、38－43、2007（査読有）

〔学会発表〕（計　1件）

①松田琴美、作田裕美、坂口桃子：ナース・トリアージの現状と課題－問診票の記入状況より－、第9回日本救急看護学会学術集会、2007.11・10、大阪

６．研究組織

(1)研究代表者

坂口　桃子（SAKAGUCHI MOMOKO）
滋賀医科大学・医学部・教授
研究者番号：40290481

(2)研究分担者

作田　裕美（SAKUDA HIROMI）
京都大学大学院・医学研究科・准教授
研究者番号：70363108